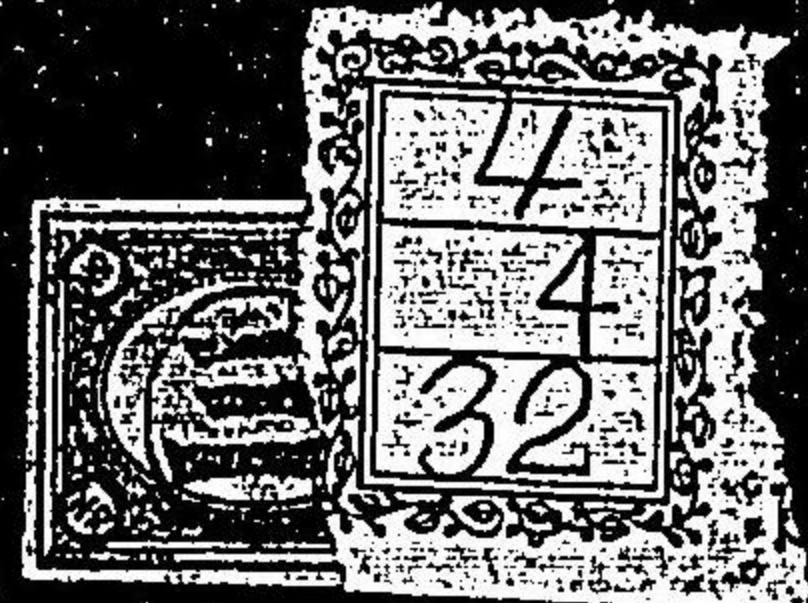
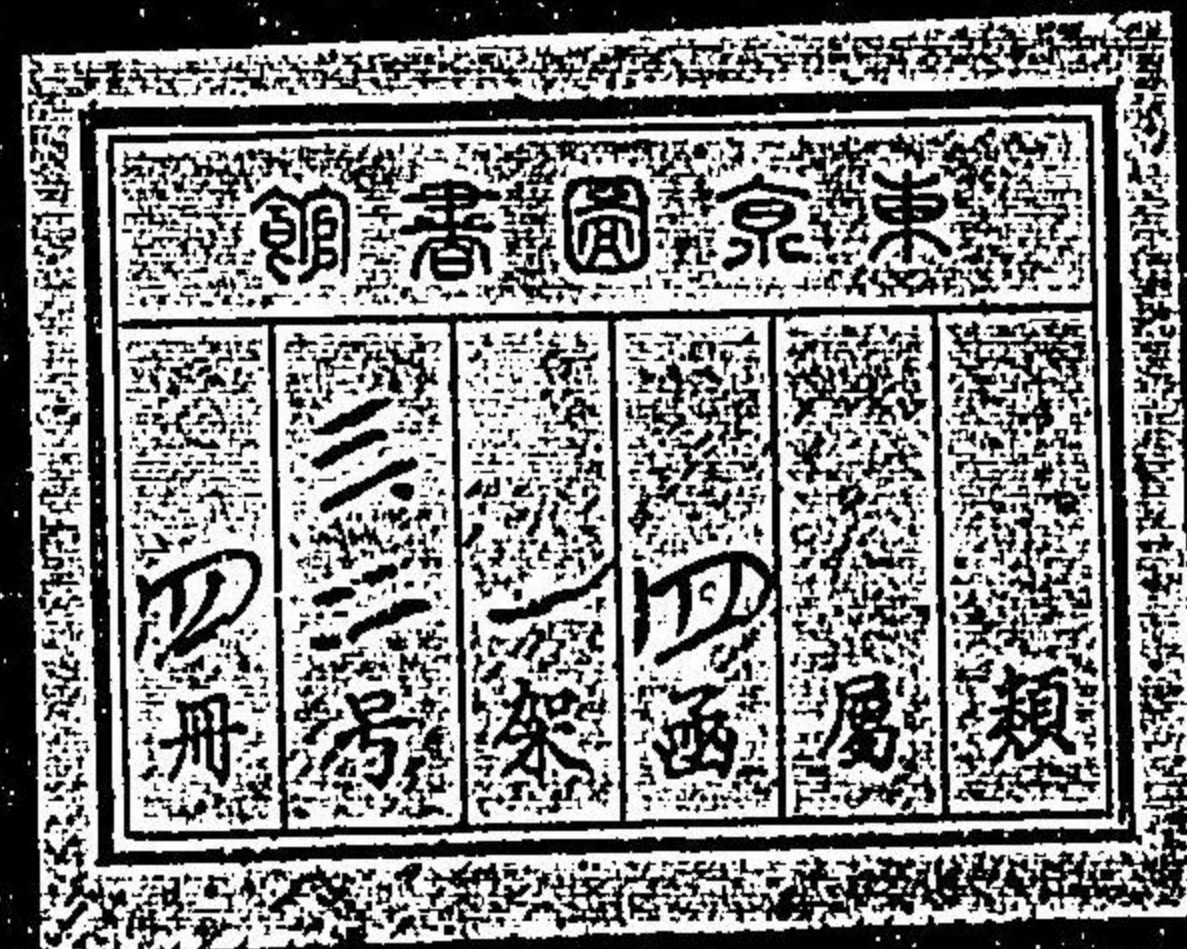


感詠一貫

佐藤元蓑繪景



099330-001-1

4-32

感詠一貫 初, 2編

佐藤 元蓑 / 編

M11、15

DBV-1776



明治戊寅十一月刊

應渠佐藤元長編輯

初篇 感詠一貫 二冊

醉菊書屋藏板

後土御門天王宸翰

玉孝丸

あまのり

けみ

浪のあかり

あしかり

浪のあかり

あしかり

後土御門天王宸翰

玉璽丸

おもしろ丸

おもしろ

おもしろ

おもしろ

玉璽丸

玉璽丸

玉璽丸

玉璽丸

感詠一貫既成。適有人贈 宸翰者。恭揭櫓上。雲章

爛然。輝映日月。仰而拜觀之。玉章鳥跡字義。偶與鄙著

暗合。如新受賜。感喜之餘。輒盥手雙鈎。以冠卷首。將以

與同志君子。長欽仰餘光云。

戊寅十一月廿三日 草莽微者佐藤元長謹書

欠

MISSING

感詠一貫序

藤原定家有言曰。凡作和歌。必先誦故鄉  
有母秋風淚句。然後構思。意格自然高妙。  
夫名篇傑作。古今何限。而特舉此以為準  
臬者。豈非以詩本於人情。而此句忠厚悱  
惻。其能得性情之正乎。定家遂於詩歌如  
此。宜其所撰。如新古今新勅撰二集。至今  
誦習不衰也。會津應渠佐藤翁。醫而有詩。  
常好讀邦人詩歌。苟有感觸其意。輒隨錄

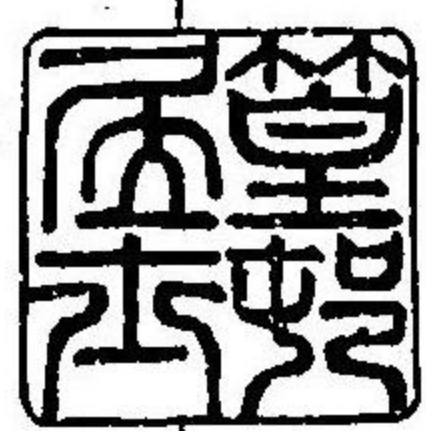
之題曰感詠一貫。將上梓徵序於余。余受而讀之。或典雅瑰麗。如紳笏而趨翔。或纏綿悽惋。如猿狖叫而鸛鶴歎。或激宕宏壯。如暴風怒濤之震撼山嶽。而蛟龍鼉鼉狂跳奮擲于其間。正變互出。剛柔異曲。而要不失至誠惻怛之意。可謂能合定家之旨者矣。然定家徒知詩歌之本於性情。而至其為人。後世頗有異議。如翁則不然。奮身孤寒之中。遂以鑿名於時。德川溫恭公召

見之。藩主因擢為醫學教授。榮矣。而翁恂恂歛退。無一毫矜張之態。平日事親甚孝。先意承色。敬養無違。既而世局一變。遭君國難。於是息影衡門。棲遲偃仰。專以吟咏自娛。酒酣耳熱。輒出斯編。倚柱以高歌。胸中輪囷屈盤之氣。借古人而傾瀉。翛然不復措意毀譽得喪之間。其襟懷之高。性情之正。殆所謂有風人之度者乎。與彼營營奔競。以爵位過其父。為寵榮者。固有間矣。

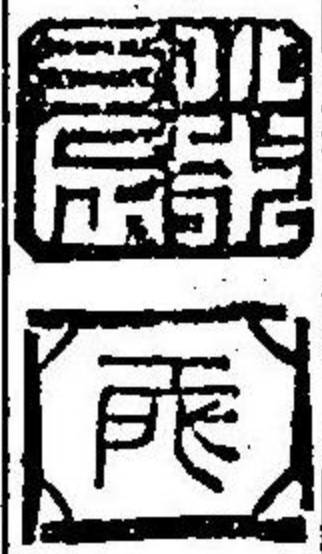
故余序其書。曰併及其平生。世若有讀其  
書論其人者。斯編之重。豈惟新古今集乎  
哉。

明治十一年十一月

篁邨島田重禮撰



觀海小此木辰書



感詠一貫序

我邦之歌興乎

神代。

我邦之詩。作乎中古。歌詩均發乎情之所感。而至誠  
貫之。六義備。而美刺存。可以化人倫。可以觀民風。沿  
至後世。歌有遺寶攬華之弊。淫風起。而大雅亡。詩有  
教辟淫哇之弊。古意衰。而新聲作。可不思哉。余才劣。  
不工詞藻。然誦古今詩歌。有所感。則隨錄。久而成冊。  
顏曰。感詠一貫。戊辰以還。樗散自安。于于然。與蟲豸  
為伍。而時披展之。與兒輩諷詠。以為樂。或感窮而泣。  
亦是喙息之至情。出乎天理。而不能自己也。



明治九年丙子菊花月應渠逸人元菴識

例言

一是編。平居隨感而漫錄者。余性好靜。頃者蜚遯。境與性適。靜中生靜。故錄載加多。今上斷神武天皇。下抵近代。詩歌若干首。整錄為卷。以示兒輩。聊倣孫奕之微意耳。

一孟子曰。誦其詩。讀其書。不知其人。可乎。今既熟知其人。不知其詩歌。則已。苟獲其一首半句。則宛然如見其音容。接其聲咳。有潛然淚下者。有不覺肅然起敬者。此非自詞華上而發。而感發于中也。先輩有不論工拙。以人取詩歌者。抑有故哉。是編所錄。如山田古嗣詩。永田佐吉歌。是也。此類甚多。讀

者體諸。

一癸丑以來。國勢一變。殉難節義之士之詠。前後梓行。誦之毛髮竦立。宜就各書而閱焉。此編所載。僅十二三已。

一隨讀隨錄。固有挂漏之恨。讀者補入。為惠大矣。如其出典。多不錄。評說亦然。假令錄出。務從省略。手眼第着于感字上。

一原稿。古人小傳。或評說攷證。不係詞章者。亦多登載。今刪之。厭冗雜也。其存者。什一二。庶乎尚友論世之一助歟。愚見亦間攙插。想未必是。擇之為可。一原稿。隨感而錄。故如俳歌。亦皆摺摭。今以其繁蕪。

一槩芟落。惟如大高忠雄等之什。固足聳動人者。不忍勇割也。現今諸名家。亦皆不錄。蓋有意于續錄也。

一情致相須者。或可資攷鏡者。某詠下。錄某詠者。間有焉。如紫式部歌下。錄賴山陽詩。北條時賴歌下。錄廣瀨淡白詩。是也。皆出一時之感想。故蕪雜無次。稱呼亦無義例。多從世所稱者。如女流。緇徒。是也。讀者恕諸。

丁丑櫻花月識于醉菊書屋元莖

此編家君嘗先元莖等記誦者。故以簡為主。不用細釋。元莖時似同人。或從空鏤梓。竟至問于世。系稿必代集以後。

秋保平以後。或載出典。諸本異同。細去行間者。及出典不詳。可須參訂者。皆標出上層。今一槩不錄。有丙子以來。添載者。整次錄之。亦家君之意也。此皆校勘方畢。余不似。顧不免。諫謨。冀大方是正。戊寅十一月十九日。元董謹記。

感詠一貫卷一

目次

|        |      |      |
|--------|------|------|
| 神武天皇   | 日本武尊 | 弟橘姬  |
| 武內宿禰   | 仁德天皇 | 王仁   |
| 磐姫皇后   | 衣通郎姬 | 舒明天皇 |
| 齊明天皇   | 天智天皇 | 弘文天皇 |
| 皇后     | 葛野王  | 藤原鎌足 |
| 譽謝女王   | 額田王  | 中臣大島 |
| 紀麻呂    | 安貴王  | 河島皇子 |
| 大神高市麻呂 |      | 大津皇子 |
| 大來皇女   | 志貴皇子 | 文武天皇 |

舍人親王

釋智藏

釋行基

紀男入

春日藏首老

高市古人

美努淨麻呂

紀末茂

釋辨正

遣新羅使人妻

高橋連黑人

釋道慈

山田三方

藤原史

柿本人麻呂

山部赤人

元明天皇

大神安麻呂

櫻井真人

大伴旅人

山上憶良

元正天皇

背奈行文

土理宣令

下毛野蟲麻呂

聖武天皇

紀古麻呂

橘諸兄

長屋王

藤原總前

藤原宇合

淳仁天皇

藤原萬里

麻田陽春

石上乙麻呂

黑人

阿倍仲麻呂

藤原清河

笠金村

沙彌滿誓

角麻呂

大伴家持

淡海三船

桓武天皇

菅原清公

朝野鹿取

釋最澄

釋空海

釋玄賓

平城天皇

巨勢識人

賀陽豐年

釋喜撰

和氏

嵯峨天皇

滋野貞主

藤原冬嗣

小野峯守

良峯安世

大枝直臣

有智子內親王

高丘茅越

坂上今經

坂上今雄

林婆娑 淳和天皇

小野小町

山田古嗣 小野篁

藤原關雄

橘妙 仁明天皇

釋遍昭

光孝天皇 菅原道真母 都良香

尾張連濱主 釋素性 惟喬親王

在原行平 宇多天皇 田口達音

大友黑主 藤原敏行 在原業平

王孝廉 伊勢 文屋有季

大江千里

感詠一貫卷一

東京 佐藤元長編纂

男 元董校

神武天皇

女系乃正仲とまをよむはまらふといぬよおておの姫とを給く  
 此れは天皇伊須氣余理姫の栲井河此家を行幸し給ひ後に余理非  
 入内と給ひしる時の歌ふて宮よ人此宮とあつて三十一字は給ふり  
 篇田出谷の侍天皇経始磐余宮四海一家此會同南音始唱筆  
 原詠採録何無冠國風とありは栲井河の浪は彼出雲の雪とまを  
 ふへくおほえを侍れは我道とまをむはまは素を侍へく抑夫婦人倫の  
 初父子兄弟君臣朋友此道を皆あふま基すは聖人の教は禮始慎

于夫婦とあり禮を以て夫とあり婦とありのまは合巻の始よりいら  
すまも敬慎の意一あはしりたるも年月を經るまの互に禮を失ひ  
あしぬ福をひき出ひ多し有別有義の聖訓信を承へりむや

日本武尊

屋孫尔乎とありむのほひのりかおとれ一人のありむとありぬ  
たかおの一人をたすむとあり

これ屋孫尔乎との歌ありこの外出雲建を平らひ給ひけり  
あひはり筑波のこ歌終褒野よて豊清の討のこ歌を日本紀古  
事記もくくく就てくくく一書空圖賛よ刺強虜風柝雄揮寶劍  
回炎風短折雖福不終禮贈與至尊同とありこの歌あつて二十九  
て豊清の武略のこ歌あり又雅もも考得ふ後の武略せむらむ

や後ら痛惜せむらむ

弟橘姫

やんぬとありあむのこ歌ふとあり火をわありにきてとあり君は  
此の歌お様の海よと言はるる水一色ふけり流ちがごとし事記  
出あり橘守の部は焼津をよとて余又久冬寅のこ歌確日嶺を踏よ  
橘守とありはあむとありあむらりて確め山今も遠くたらしま  
ちのちとありお歌をたし海よとて冬今一冬のと詞歌のこむらあ追  
おとておあえりほふとておあふらわい山ぬ園おのたふ西登確日  
嶺又顧吾孀郷吾孀湫無極烟樹帶朝陽征馬慘不進行人憂  
且傷躊躇弔古昔吾孀不可望とありは話のこ歌を引めて思  
友の信を述るるこ歌あり一書空の詞歌のこ歌を載の下ゆらん



























與朝主人

釋辨正

鐘鼓沸城闔。戎蕃預國親。神明今漢主。柔遠靜胡塵。  
琴歌馬上怨。楊柳曲中春。唯有關山月。偏迎北塞人。

遣新羅使人妻

君の如海へのやとふおろたふさあひのまぢかしくし  
は人のいへし秋まゝとあひのまぢかしくし  
くちかひにまぢかしくし

高橋連黑人

いかにあひまぢかしくし  
妻乃のいへし河のまぢかしくし  
いかにあひまぢかしくし

在唐奉本國皇太子

釋道慈

三寶持聖德。百靈扶仙壽。壽共日月長。德與天地久。

三月三日曲水宴

山田三方

錦巖飛瀑激。春岫擘飛開。不憚流水急。唯恨盞遲來。

元日應詔

藤原史

正朝觀萬國。元日臨兆民。有政敷玄造。撫機御紫宸。  
年華已非故。淑氣亦惟新。鮮雲秀五彩。麗景耀三春。  
濟濟周行士。穆穆我朝人。感德遊天澤。飲和惟聖塵。

藤原氏の詩史に傳ふはもの文忠言まよしく首を以て詩史  
に華賂而典則と評せり

柿本人麻呂



山部赤人

田子の浦由は出づるはしほのつらき  
 可きものぞよふはなほなほなほの  
 大今の春に人麻呂もかへりて  
 人あはれもよきあはれもよき  
 事ごとくはしほのつらき  
 近人の詩も雪懸田浦王孫艇  
 人垂仁帝裔とちの紀淑望の  
 邊氏をよみあひ日本紀第  
 藤原のまゝはしほのつらき

元明天皇

山部赤人の詩も雪懸田浦王孫艇  
 人垂仁帝裔とちの紀淑望の  
 邊氏をよみあひ日本紀第  
 藤原のまゝはしほのつらき

山齋言志

大神安麻呂

欲知間居趣。来尋山水幽。浮沈烟雲外。攀翫野花秋。  
 稻葉負霜落。蟬聲逐吹流。祇為仁智賞。何論朝市遊。

櫻井真人

佐保川のほとりには  
 大伴旅人

大伴旅人

新秋のまはるるは  
 大伴旅人

石重  
接稻  
擬相



のいふも君子其人をうしむるを思ふやとて比無くはせしむるや

土理宣令

乃き聖の御の白はまじりてはともよもしむる言おまほし由

秋日於長王宅宴新羅客 下毛野蟲麻呂

出時逢七百祚運啓一千。況乃梯山客。垂毛亦比肩。

寒蟬鳴葉後。朔雁度雲前。獨有飛鸞曲。並入別離絃。

聖武天皇

おのいふもこのふらふらとておもふのふらふらとておもふのふらふらとておもふ

妹も遠もたはたおもふのふらふらとておもふのふらふらとておもふのふらふらとておもふ

續古今よ天皇のいふらおもふのふらふらとておもふのふらふらとておもふのふらふらとておもふ

いふもこの代の終は撰の天啓と皇秋の國はのふらふらの廣のふらふらとておもふ

あつこのいふらおもふのふらふらとておもふのふらふらとておもふのふらふらとておもふ

撰者よらふらおもふのふらふらとておもふのふらふらとておもふのふらふらとておもふ

望雪

紀古麻呂

無為聖徳重寸陰。有道神功輕球琳。垂拱端坐惜歲

暮。披軒褰簾望遙岑。浮雲變黓縈巖岫。驚飈蕭瑟響

庭林。落雪霏霏一嶺白。斜日黯黯半山金。柳絮未飛

蝶先舞。梅芳猶遲花早臨。夢裏釣天尚易涌。松下清

風信難斟。

橘諸兄

ふらふらおもふのふらふらとておもふのふらふらとておもふのふらふらとておもふ

おもふのふらふらとておもふのふらふらとておもふのふらふらとておもふのふらふらとておもふ

意談一貫 卷一 十八 依藤氏藏本

駐馬寧樂山

長屋王

紫のひの凝る山を起つてねまはあけのよるをよめやも

秋日於長王宅宴新羅客 藤原總前

職貢梯航使。從此及三韓。岐路分衿易。琴樽促膝難。  
山中猿叫断。葉裏蟬音寒。贈別無言語。愁情幾萬端。

七夕

帝里初涼至。神衿翫千秋。瓊筵振雅藻。金閣啓良遊。  
鳳駕飛雲路。龍車越漢流。欲知神仙會。青鳥入瓊樓。

此詩駿々乎王楊盧駱と詩史ふ評せざる史を補す。鎌足史総  
前守合百川父祖相つて、國友の柱石その偉績そのまゝ可也而文  
藻もすまじ傑出せる何ぞ其盛あるや

藤原守合

玉の露のたはれんはなつて。あまのつねのあはれんはなつて。いづれを  
山にせ石のたふし移ちほそまらうとほほしやあまの山にせ石のたふし

在常陸贈倭判官留在京 有序。懷風藻可閱。

自我弱冠從王事。風塵歲月不曾休。寒帷獨坐邊亭  
夕。懸榻長悲搖落秋。琴瑟之交遠相阻。芝蘭之契接  
無由。無由何見李將鄭。有別何逢遠與猷。馳心悵望  
白雲天。寄語徘徊明月前。日下皇都君抱玉。雲端邊  
國我調絃。清絃入化經三歲。美玉韜光幾度年。知己  
難逢匪今耳。忘言罕遇從來然。為期不怕風霜觸。猶  
似巖心松柏堅。

悲不遇

賢者悽年暮。明君冀日新。周日載逸老。殷夢得伊人。  
搏舉非同翼。相忘不異鱗。南冠勞楚奏。北節倦胡塵。  
學類東方朔。年餘朱買臣。二毛雖已富。萬卷徒然貧。

遊吉野川

芝蕙蘭蓀澤。松柏桂椿岑。野客初披薜。朝隱暫投簪。  
忘筌陸機海。飛繳張衡林。清風入阮嘯。流水韻嵇琴。  
天高槎路遠。河迴桃源深。山中明月夜。自得幽居心。

奉西海道節度使之作

往歲東山役。今年西海行。行人一生裏。幾度倦邊兵。  
宇合風範凝。深ひろく墳典。涉軍國。徑營。以心

字文藻の留め當時翰墨乃宗とあると史あり其為人想入  
へし送系ありく俤らざる惜む

天平寶字元年内裏肆宴歌 淳仁天皇

天皇淡路の行幸かよひの哀さなる其不勝憂憤踰垣而逃明日溢  
然崩と雖も余史を讀てしよる急掩卷痛哭せしるハ今代謚號  
字上のゆきとてハ天監の昭くハハ趣りきくハ聖更よきハ世を也

仲秋釋奠

藤原萬里

運冷時窮蔡。吾衰久歎周。悲哉圖不出。逝矣水難留。  
玉俎風蘋薦。金罍月桂浮。天縱神化遠。萬代仰芳猷。  
鳳鳥不至。河不出圖。吾已矣夫。孔子述懷の詩美至誠小



斐すもとの第三句はまよひの景樹の論語一部とて歌道本  
 一の書とて見あひていふまゝにハクもや詩歌もとより一源ある  
 字世の歌人のこと人事と自つて異つて其ま誠ま斐すものさ  
 を失ひ身ハ貞潔とて淫風の詠比はまよひのまよひハ何そや  
 而森芳洲の詩之所以感人心者天道人事物態世變一切可喜  
 可愕可憂可樂者莫不於是乎在也歌亦莫不然惟專止於男  
 女相戀之情其他徧及萬物者十居其一此可恨爾といふまゝ  
 吟へまよひ

過神納言墟

一旦辭榮去。千年奉諫餘。松竹含春彩。容暉寂舊墟。  
 清夜琴樽罷。傾門車馬疎。普天皆帝國。吾歸遂焉如。

君道誰云易。臣義本自難。奉規終不用。歸去遂辭官。  
 放曠遊嵒竹。沈吟佩楚蘭。天闡若一啓。將得水魚歡。  
神納言ハ高市麻呂あり此は持統の朝上表切縁のと  
 き其轉まよひふよりて官字をさしとるゆゑ史に載  
 せしむれば詩史を補ふべきや

和藤江守詠禪叡山先考之舊禪處柳樹之作

麻田陽春

日月荏苒去。慈範獨依依。寂寞精禪處。俄為積草堆。  
 古樹三秋暮。寒花九月衰。唯餘兩楊樹。孝鳥朝夕悲。

贈舊識

石上乙麻呂

萬里風塵別。三冬蕙蕞衰。霜花逾入鬢。寒氣益羶眉。



藤原清河と共に日本を歸らんとする時の詩あり李白集  
 日本晁卿辭帝都。征帆一片繞蓬壺。明月不歸沈碧海。白雲  
 愁色滿蒼梧。の詩あり仲麻呂出船の後瀕死すと謂へるよりして  
 此作あり王維包信趙驊等此贈詩をあり

此の詩あり藤原清河の詩あり  
 大和の作あり藤原清河の詩あり  
 の詩あり藤原清河の詩あり  
 月ハあの出あり藤原清河の詩あり

元平唐より死せり其後從二品を贈り又正二位を贈り  
 幽壤既隆於前命。重叙崇班。俾於命詔のみはのりあり  
 情あつて廣瀬淡窓の詩。禮樂傳來啓我民。當年最重入唐人。  
 東風不為歸帆便。莫說晁卿是叛臣。とあり余亦不福せり

藤原清河

笠金村

笠金村の詩あり  
 拾遺の詩あり

別まて金甲をけりけの鶴せもいと契沖りけり

沙弥満誓

空の舟を何よたるとも船の舟をたるとも一船の舟をたるとも

角麻呂

風まじりまはれはるる風まじりし海入のつり舟の舟をたるとも

大伴家持

鶴たけの舟をたるとも一舟の舟をたるとも一舟の舟をたるとも

大まの舟をたるとも一舟の舟をたるとも一舟の舟をたるとも

秋まじりまはれはるる秋まじりし海入のつり舟の舟をたるとも

から舟をたるとも一舟の舟をたるとも一舟の舟をたるとも

海入のつり舟をたるとも一舟の舟をたるとも一舟の舟をたるとも

秋の舟をたるとも一舟の舟をたるとも一舟の舟をたるとも

釋萬葉集云臣下の才徳忠功な程こまけりて

折ゆ秋の舟をたるとも一舟の舟をたるとも一舟の舟をたるとも

忠も倭もよまるとも一舟の舟をたるとも一舟の舟をたるとも

聞よ忠たるとも一舟の舟をたるとも一舟の舟をたるとも

上座殿天をより廣帝の初よりくる凡四千餘番とて多葉か持晩書三日遊覧の七律は羽將催入九曲流の句あり記憶せしむ姑とありし教

和藤六郎出家作

淡海三船

戚里辭榮親。玄門問覺津。法雲爰疊彩。惠日更重輪。

樂道心逾逸。安空理轉真。高風如可望。從子謝羣塵。

史ま抄のく三船為人聰敏博涉群書善屬文名高一時とあり

五懷風藻ハ三船の作ありと林藪峰の祝ありと船ハ葛野





閑林獨坐草堂曉。三寶之聲聞一鳥。一鳥有聲人有  
心。聲心雲水俱了了。

高野大師廣傳云。弘仁七年八月。有勅。給吳綾錦五尺。屏風四  
帖。令書。獻古今詩人秀句。天皇觀其書迹。詩云。深山居住振奇  
名。冰玉顏容心轉清。世上草書言為聖。天縱不謝張伯英。暫乘  
雲嶺一念隙。書得綾羅四帖屏。初見筆精鸞鳳體。清省墨妙虬  
龍形。高峯墜石未動地。絕澗長松豈揚聲。乱點乍疑舞鶴起。赴  
湘連似旅雁行。花苑正開春日色。月天遍照秋夜明。對之觀者  
目眩矚。共賞草書咲丹青。絕妙藝能不可測。二王沒後此僧生。  
既知風骨無人擬。收置秘府最開情。日本詩紀注云。清當作請。赴湘二字不可讀。恐有誤。元美按。連ハ連飛のこよく連似赴湘。旅雁行と二字地を易て讀めハ其義明らるるもはゆに旅ハ開ハ澗の誤あらざるを天皇

哭海上人の長篇あり得道高僧氷玉清。乘栢飛錫度滄溟。化身  
住世何能久。塵界定留惠遠名。句從此津梁長已矣。魂兮何處  
救蒼生。悲來八乘の謀

釋玄寶

と鶴はほたけのつらねはまのつらねのつらねのつらねのつらね  
山阿のつらねのつらねのつらねのつらねのつらねのつらね  
嗟嘆と空の哭賓和尚の法衆生前蘿席空留月。没後金鑑誰  
添香の句あり

賦櫻花

平城天皇

昔在幽巖下。光華照四方。忽逢攀折客。含笑宜三陽。  
送氣花多少。垂陰枝短長。如何此一物。擅美九春場。

元董  
校宜  
擬立

奉和侍中翁主挽歌

巨勢識人

夜谿生涯盡。佳城艷質淪。婺星藏遠漢。仙桂落虛輪。  
淑問遺仍在。恩榮歿更新。冥途無節候。何處復知春。  
曉月銘旌出。春山轅馬通。繁笳悲薤露。畫翣送松風。  
洛雪迴光罷。巫雲行影空。可嗟桃李貌。長掩重泉中。  
和進士貞主初春過管祭酒舊宅悵然傷懷作  
閑庭宿草復無掃。虛院孤松自作聲。但見平生風月  
處。春朝花鳥慘人情。

秋日別友人

林葉翩翩秋日曛。行人獨向遠山雲。唯餘天際孤懸  
月。萬里流光遙送君。

別諸友入唐

賀陽豐年

數君為國器。萬里涉長流。奮翼鵬天渺。軒轅鯤海悠。  
登山睂自結。臨水淚何收。但此相思處。空見白雲浮。  
傷野將軍

蝦夷稱亂久。擇將屬名賢。屈指馳三略。揚睂出二權。  
虎頭勲未展。馬革志方宣。完士何難遇。徒悲凶問傳。  
高士吟

一室何堪掃。九州豈足步。寄言燕雀徒。寧知鴻鵠路。  
豐年延曆中東京の學士より冷博程道融海船王より送る  
いふ平城天皇の時式部大輔は梓以時女謁志はく行はま英賢  
排せらるる豊年ひくひく素志をいふを云然自らよめる仁徳帝





栖隱多歸趣。從來重練邪。駕言尋此處。處處幾經過。

烟泛麓山樹。霞昭元萇按昭瑩野花。禪居無異物。微

月入巖阿。

此詩經國集。出於氏族。詳其或曰和氣清麻呂の姉也。史

を按するは清麻呂の姉法均尼初名ハ廣蟲為入貞順節操嘗て

帝を誅めて當斬者數百人を活し。その亂後飢疫ハ民間の棄兒を

收養するものハ十三兒又清麻呂と友愛天子姉弟不ハ財物及ハ

其遺言等々。其の稟賦厚意禪理ハ深きものありといふこと

けんや此詩断々法均尼の作と云ふことあり。又後國神官寺は

此人の建てることあり。山陽の神宮寺ハ寄題セテ詩ハ法燈何獨

照千春。阿弟擎天挽日輪。不似李家帰異姓。卻由煮粥焚鬚人。

とあり清麻呂の忠烈。日星炳曜。そのことハ法均尼の大過人者

史傳存ク。其の而詞藻ハ未だある。此詩ハ其一斑と云ふ奇

と云ふことあり。や余最結末の淵幽古澹を愛せり。嗚呼。此弟ハ

此姉あり。清麻呂の曾孫時雨ハ。為典藥頭。後累代仁術を以て

鳴る其家範也。

重陽節神泉苑同賦三秋大有年

嵯峨天皇

題中取韻

是氣何寥廓。登高望悠悠。大田權豊稔。從此歲工休。

芳萸筵上薦。時菊盞中浮。林洞逢搖落地。清為潦收。

蟋蟀藏聲曉。蒹葭變色洲。重陽常宜宴。况復有年秋。

和野評事旅行吟

信詩一員 卷一  
久成君為客。幽居我作翁。旅愁如可語。相待北山中。

吏部侍郎野美聞使邊城。賜帽裘。

歲晚嚴冬寒最切。忠臣為國向邊城。貂裘暖帽宜羈旅。特贈卿之萬里行。

元董  
按持  
疑持

春日遊獵日暮宿江頭亭子

三春出獵重城外。四望江山勢轉雄。逐兔馬蹄承落日。追禽鷹翮拂輕風。征船暮入連天水。明月孤懸欲曉空。不學夏王荒此事。為思周卜遇非熊。

答澄公

遠傳南嶽教。夏久老天台。杖錫凌溟海。躡虛歷蓬萊。朝家無英俊。法侶隱賢才。形體風塵隔。威儀律範開。

袒肩臨江上。洗足踏巖隈。梵語翻經閣。鐘聲聽香臺。徑行人事少。宴坐歲華催。羽客親講席。山精供茶杯。深房春不暖。花雨自然來。賴有護持力。定知絕輪迴。

史字持す。天皇天才煥發。下筆成章。其訓飭諸皇子。莫不以學術。而皆以政事文學。顯於當時。若文之治。可謂隆矣。とある。有智子内親王のよきまこと行。要のよきハ幼齡より文學の長し。此ハ古今のよきまこと行。聖旨のよきまこと行。仰るまこと行。

春日奉使入渤海客館

滋野貞主

蒼茫渤海幾千里。五兩舟中送一年。鯁壑艱辛孤跡度。鯨濤致怕遠情傳。春鴻愛暖南江水。旅客看雲北海天。曉籟莫驚單宿夢。他鄉覺後不勝憐。

貞主曆朝名臣の詩賦をあつめて、經國を末廿卷字作まじり作  
者百七十八人今傳するもの僅よ六卷惜む

奉和聖製宿舊宮應制

藤原冬嗣

林泉舊邸久陰陰。今日三秋錫再臨。宿植高松全昔  
節。前栽細菊吐新心。荒涼靈沼龍還駐。寂歷稜巖鳳  
夏尋。不異沛中聞漢筑。謳歌濫續大風音。

竹樹新栽。流水遠引。即事有興。把筆直疏。得寒

字。應制

小野峯守

竹樹新成蔭。春花如欲闌。雜花壓欄暖。瀑水繫梁寒。  
侍女開扉望。親臣捲箔看。非經山河遠。即坐得考槃。

途中九日

良峯安世

客裏三秋暮。途中九日來。相留問行旅。如何菊花開。

詠燕

大枝直臣

表瑞集齊郡。呈靈入玉筐。龍潛避莢節。鳳舉逐暄光。  
栖宇傳新語。銜泥尋舊梁。去來不失候。可謂識行藏。

春日山莊

有智子內親王

寂寂幽莊山樹裏。仙輿一降一池塘。棲林孤鳥識春  
澤。隱澗寒花見日光。泉聲近報新雷響。山色高晴暮  
雨行。從此更知思顧渥。生涯何以答穹蒼。

親王の嘆哉の皇女涉經史。善詩文。齋院とあり性貞潔。

てとく神よつとく孫よ此詩十七のよきはとく孫ひとく音

節瀏亮當時の傑作ともいふ。天皇書懷賜有智子公主の

傳表忝以文章著邦家。莫將榮樂負烟霞。即今長抱幽貞志。無事終須送年華。の付候日本後紀より出たり。其意は、

神泉苑侍花宴。賦落花篇。應制。高丘茅越。

落花飛。飛去落丹墀。本謂隨風落。方知被化歸。乍往

乍還浮御盃。一連一斷點仙衣。無心草木猶餘戀。况

復微臣醉思危。

步信濃坂

坂上今經

積石千里峻。危途九折分。人迷邊地雪。馬躡半天雲。

巖冷花難笑。溪深景易曛。竹關何處在。客思轉紛紛。

秋朝聽雁寄渤海入朝高判官釋錄事

坂上今雄

大海途難涉。孤舟未得回。不如關隴雁。春去秋復來。

久在外國。晚年歸學。知舊零落。已無其人。聊以

述懷。簡山。請益菅原五郎。

林婆娑

晚年歸學館。舊識幾相辭。物是人非日。悲來樂去時。

忘筌無故友。傾蓋有新期。欲說平生事。居然淚不持。

錢美州掾藤吉野得花字

溥和天皇

今宵倏忽言離別。不慮分飛似落花。莫怨白雲千里

遠。男兒何處是非家。

弘仁の庚寅平城遷皇西内より在り溥和皇大弟を以て東京に在

里三宮融睦。孝友天皇。花是月夕。懽樂相接。客章往復。幾虛言

あしきよ右文の美徳のこころを慕ひて  
清水の瀟灑のこころを慕ひて  
小野山町

大和物語は探訪のこころを慕ひて  
のこころを慕ひて  
あしきよのこころを慕ひて

これかあまのこころを慕ひて  
のこころを慕ひて  
一女二僧三縉紳

何縁喚做六仙人  
三十一字纏離吻能動人  
天感鬼神

こころを慕ひて  
のこころを慕ひて  
あしきよのこころを慕ひて

人森品の山部赤人  
山部赤人の名行跡  
山部赤人の名行跡

あしきよのこころを慕ひて  
のこころを慕ひて  
あしきよのこころを慕ひて

奉試賦秋雨 詩中用 山田古嗣

秋雨正滂沛。旬朝灑玉堂。花濃叢發越。燕度石飛翔。  
已濯蘭林佩。更沾蕙草香。迎風散斜影。清暑送浮涼。  
似露飄長樂。如塵拂建章。長年無破塊。崇徳詠時康。  
古嗣天性篤孝。廉謹寡言。幼喪母。敬事從母。嘗讀書傳。至樹欲  
靜。而風不止。子欲養。而親不在。流涕不禁。卷帙為之沾濡。後丁

父憂哀毀過禮。と文徳實錄よ出は待疑らる傳言の誤あらん考ふべし

隱岐の國よ流すまはるる舟よのこころ出づるのこころ

ちるる心よのこころ

あよのふ八十塔のけしきよのふゆふゆのこころのこころ

渡口郵船風定出。波頭謫處日晴者。ふき同時の待あり共ふ其

景況寂然こころのこころ除けしきよのこころのこころ

近以拙詩寄王十二。適見惟十四和之作。因以

解答。

勝負人間争奈何。淬将心劍戰肝魔。虚名日脚翻陽

焰。忌累風頭亂雪波。賤得交情探底盡。老看時事到

頭多。見君行李平如砥。誰向羊腸取路過。

元董  
按忠  
疑惹

重勗

野人閑散立身何。自課功夫文字魔。寒步更教吹退

鷓。醜顰還被敵橫波。水中投物浮沈異。手裏藏鈎得

失多。折軸孟門難進路。可憐騏驥坦途過。元其被  
寒當憲

篁信はら竄せしむる時謫行吟七十韻ありあつたに字稱補せり

に漢抄よいふ弘仁帝自待の閑閣唯聞朝暮鼓。登樓空望往来

船。空を遙よ改めし試みしは清原夏野等と奉勅して令義

解を撰せしむる篁の文すまはるるあまの其家多員して母よこへ

て至孝俸入いひて親友を絶せし其為人最重なりしと云ふ

不羈よして直言を好むあまの其家多員しむる野

狂よるるあまの篁の信ふ暗作野人天眞性。自古狂官世呼名。と





いづはまのむねにみちのきりぎりすの音にきこゆれば  
白砂の宮にけしきも淡の痕にすむるをきけぬありし  
の言をのぞく

閑庭對雪

仁明天皇

玄雲聚萬嶺。素雪颺宮中。帶濕還凝砌。無聲自落空。  
奪朱將作白。矯異實為同。閑坐獨經覽。紛紛道不窮。

承和元年天皇文宣王を崇寧殿に親奠し自ら尚書宮講  
したまひは恒例の事なりと云ふ事ありしに  
發實のむねにみちのきりぎりすの音にきこゆれば

釋遍昭

閑庭對雪のむねにみちのきりぎりすの音にきこゆれば  
發實のむねにみちのきりぎりすの音にきこゆれば

閑庭對雪のむねにみちのきりぎりすの音にきこゆれば

通昭のむねにみちのきりぎりすの音にきこゆれば

顔延之のむねにみちのきりぎりすの音にきこゆれば

りて指行堅固のむねにみちのきりぎりすの音にきこゆれば

發實のむねにみちのきりぎりすの音にきこゆれば

光孝天皇

閑庭對雪のむねにみちのきりぎりすの音にきこゆれば

閑庭對雪のむねにみちのきりぎりすの音にきこゆれば

菅原道真母

閑庭對雪のむねにみちのきりぎりすの音にきこゆれば

秋夜卧病

都良香

閑庭對雪のむねにみちのきりぎりすの音にきこゆれば





平性範文才ありて詩よりくは天皇勅して弘仁以後の詩を撰

仲春釋奠聽講論語同賦仲尼如日月。

田口達音

人間有道仲尼生。天上無雲日月行。能在人間天上。一短軀低眼仰高明。

劉冷窓の漢論語の注九州一掃狄蠻塵却說夷吾心未仁始信宋家南渡日新亭收泣竟無人とあり達音の意道ハ孔子帰國の贊述して冷窓の意王霸よりありて慨嘆の含めりともいふなり聖學を講じしものたゞよ看過すともいふ況輒近洋教めり入らざるも抑てをい況政宋諸國の形勢は然てをい

史記竟宴詠史得毛遂。

趙勝知士早。毛遂出群遲。客舍三年默。荆庭一旦威。既揮昇殿劍。終脫處囊錐。寄語彼同輩。如何目擊時。

讀老子

愚自作愚賢自賢。詐愚詐德未玄玄。猶嫌老子多華飾。無欲還為有欲先。

この詩達音の撰にして題東郭居の詩藥圃君臣三兩畝書齋道德五千言の句あり是より別裁ありて恬澹閑遠條情あり余亦よ福なり

自勸閑居

人生百歲有誰得。縱得全生又易除。衰病豈無閑退

日。健時閑退是閑居。

あつ、眼未昏時花可愛。身猶健日酒宜歡。光景在、  
以阪轉轂。祭華住世水成書。卷の句ありと致せり。

大友黒主

あつ、眼未昏時花可愛。身猶健日酒宜歡。光景在、  
以阪轉轂。祭華住世水成書。卷の句ありと致せり。

尾の唐人の歌作の國の...  
あつ、眼未昏時花可愛。身猶健日酒宜歡。光景在、  
以阪轉轂。祭華住世水成書。卷の句ありと致せり。

藤原敏行

在原業平

あつ、眼未昏時花可愛。身猶健日酒宜歡。光景在、  
以阪轉轂。祭華住世水成書。卷の句ありと致せり。





